

感覺・動・魂

——プラトンの自然学への予備的考察——

内 山 勝 利

一、プラトンの感覺論

感覺というものは、多かれ少なかれ、各者各様であり、しかも時々刻々に変容してゆく。

感覺をめぐるこうした事態を、『パイドン』ないし『国家』を著わした時期におけるプラトンは、もっぱら真の認識（エピステマー）と真の实在（イデア）のありかたを示唆するための、言わば対比的な観点からのみ取り扱っていた。そうした対処が最も鋭く表明されたのは、言うまでもなく『パイドン』においてである。たとえば次のような一節（八二E—八三A）には、あたかもわれとわが目を刺し貫いたオイディプス王にも似た激しい否定の衝動すら感じられるはしないか。

「魂の状況というのは、なんのことはない、肉体の内につきり縛りつけられ貼付けられてしまつて、ちょうど牢のかごい、のなかからものをみるように、肉体を通じてでなければ、およそ存在するものを考察することはできず、たましいの、たましい自身による考察は不可能であるように強いられて、まったく学びを知らない状態のうちを輾

転としている有様であるのだ。そしてこの牢獄のまさに巧妙に仕込まれている点というのは、その囚われの状態をつくり上げていくのが、じつは欲望であること、つまり縛られているその者自身がとりわけその束縛に協力しているともいえる点にあるのだが、それを「哲学」は見ぬく。」

とはいえ、この『バイドン』においてさえ、感覚の領域は、完全に有害無益なものとして捨てさられたわけではない。むしろ「学習」想起」説のコンテクスト（七二E以下）においては、それはある意味で不可欠な前提条件としての役割を与えられてさえている。なぜなら、感覚的経験は、けっして実在についての真の認識を与えてくれるものではないが、しかしそれを「想起」（アナムネーシス）する手がかりをわれわれに与えてくれるからである。われわれは非の打ちどころなく完全な円というものを、具体的な事物や描かれた図形として見ることは、けっしてありえない。しかし、ほぼ円形をした諸事物や、多少ともゆがみのある円形の図形を目にすることを手がかりにしてこそ、完全に円い「円そのもの」を思い描くことができるであろう——。

この時期のプラトンにおける感覚のステイタスについては、『国家』第五卷末において、最も明確に定式化されている。すなわち、感覚（ないしドクサ）は「誤ることのある」（四七七E六）暗い認識であり、感覚的事物は「ある（*einai*）とも、あらぬ（*μη einai*）とも、その両方である（すなわち *einai kai μη einai*）とも、そのいずれでもない（すなわち *οτι einai kai οτι μη einai*）とも、固定的に考えることのできないもの」（四七九C三—五）、「純粋なものと粹純な *μη οτι* との中間のあたりを輾転しているもの」（四七九D五）という逆説的な言われかたがなされているのである。

しかし、それはあくまでイデアの世界との対比という意味における定式化にとどまるものであった。感覚および感覚的事物——さらにはその集積としてのこの世界全体——のありかたそのものに焦点を当て、それらに正当な意味と

位置づけを与える作業は、後期にもちこされた、と言ってよい。プラトンの後期思想を一貫している中心課題は、イデアの離在（コーリスモス）と分有（メテクシス）という基本構想の基礎固め、およびそのイデア論を全宇宙的視野に拡張された形而上学のうちにとどのようなしかたで練り込むか、というところに定められる。このときにはじめて、感覚の問題を正当に取りおさえることが、必然的な糸口として、要請されてきたのである。ホラートンとしてのこの世界の構造決定は、感覚のメカニズムとの対応関係をぬぎにしては不可能だからである。中期におけるイデア論的対話篇に次いで、おそらく『パルメニデス』と接して著わされた『テアイテトス』（第一部）において、いわゆるプロタゴラス・ヘラクレイトス説というかたちで組み上げられた感覚論は、そうした意義を担ったものとして位置づけられるであろう。

さて、ソクラテスとともに、さりげない感覚的事実の一つを取り上げてみよう。

「そもそも風は同じ風が吹いていても、僕たちのうちで、ある者は寒気を感じるが、他の者は感じないというようなことが、どうだね、時折あるのではないか。またそれを感じるのにも、ひどく感ずる者とそれほど感じない者があるのではないか。」（一五二B）

同じ一吹き風の風であっても、それを冷たいと感じた者にとっては冷たいものとして現われ、それを暖いと感じた者にとっては暖いものとして現われることは、およそ否定しようのない事柄である。要するに「感じ」の問題だからである。

「したがって、ものの現われとその感覚とは、冷たいとか熱いとかいわれるようなものにおいて、またこの類のものすべてにおいて同じなのである。すなわち各人が何らかのように感覚しているところのものは、そのようなも

のとして各人にまたおそらくありもするのである。」(一五二C)

感覚に現われたこの世界、それは文字どおり、センス・データの側から類推されるべきものでしかない。しかるに、あらゆる感覚、あらゆるセンス・データは、各者各様、しかも時々刻々に変化してやまないものである。とすれば、感覚的世界にあっては、何ものといえども、

「それを君が何々とか何々様やうのものとか呼ぶのは、正当にはできないことなので、君がもしそれを大なりと呼ぶなら、それはまた小としても現われようというのだ。また重しといえば、軽しで、万事が万事かくのごとく、これらは皆あたかも単一なる何々とか何々様やうとかいうものが一つもないところからくるかのように考えられるのである。」

(一五二D)

いや、まさしくそのとおりののだ、と言い切ることによって、プラトンの感覚論は定まったと言ってよい。「同じ」風をあるいは冷たいと感じあるいは暖いと感じるという事実、「同じ」ワインをあるいは甘いと感じあるいは苦いと感じるという事実、すなわち各人が各瞬間に感覚している *ταυτὸν ταυτὸς* としての感覚は、まぎれもなく否定しようのないものであり、そのかぎりにおいて、それらはまさに真なるものとして認定してしかるべきだ、という意味である。しかしそのためには、風やワインに付されている「同じ」という規定を徹底的に消去していかなければならない。「同じ」一つのものが冷たくもあり暖くもある(甘くもあり辛くもある)という自己矛盾は許されぬ以上(上)、「同じ」一つのものがあるいは冷たくあるいは暖い(あるいは甘くあるいは辛い)という両様に感覚されたとするならば、それら相矛盾した感覚のうち、少なくとも一方は誤りでしかありえないだろう。したがって、両様の感覚をともに救おうとするならば、それぞれは「同じ」一つのものについての感覚ではない、それぞれは別個の感覚であるとしなければならぬ。かくして、感覚の救済は、その見返りとして、感覚に現われた世界の徹底的な相対化を要求してくるの

である。

では、相対化の過程をたどってみることにしよう。『テアイテトス』一五三Eから一五五Eにかけてのパラグラフに、それを読み取ることが出来る。まず前半部（一五三E—一五四A、特にA二—九）において認識論上の相対性が確認され〔i〕、次いで（一五四B—一五五E）存在論上の相対性へと深められる〔ii〕。前者はプロタゴラスの相対化、後者はヘラクレイトスの相対化と言ってもよいものである。もっとも、この後半部分の位置づけ、特に一五四B以下における大きさや数についての‘some puzzles’の意味するものについては、解釈者の間にとまどいが少なくない。たとえば、この作品についての最もすぐれた注釈者の一人、F・M・コーンフォードも、「もしソクラテスがそのままただちに感覚論のより詳細な説明におもむいたとすれば、何らの問題もなかっただろうに、……〔これらのpuzzles〕が文脈上どんな関係があるのか少しも明らかでない」と述べている。⁽²⁾しかし、感覚論をヘラクレイトス主義に連絡させるためのプロセスとして、以下に述べるような意味において、やはりそれはきわめて適切なものではないかと考えられるのである。

〔i〕 認識論上の相対性 感覚はそれを感覚する側の主体的条件によって各者各様であることの確認である。この点については、さきに風の寒暖をめぐる事例において同意ずみであり、感覚についての素朴な日常経験事項として、まさに目下の議論の出発点をなすものだったのである。われわれ人間と「犬だとか何だとかいうような動物」とが共通に同じ色を知覚するというようなことはむろんありえないし、人間同士ですら「何か他の人に現われているのと君に現われているのでは」同一ではないだろう。むしろ、「それが同じものとして現われるなんてことは、君自身にとってさえないことなのではないか。なぜなら、君自身にとって君自身の身の持ちかたは、決して同様の時がないのだからね。」——プロタゴラスの『真理論』の冒頭にかかげられた命題「あらゆるものの尺度であるのは人間だ。あ

るものについては、あるということの、あらゆるものについては、あらゆるものについては、まさにこうした主観的位相を定式化したものにほかならないであろう。

しかし、この段階においては、いまだ感覚対象そのもののありかたについては問われていない。はたして感覚的性質は、自体的な対象として「ある」ものなのかどうか。プロタゴラスの立場は、いまだそれを許すものにとどまっている。彼の主張は、

「おのおののものが何らかの様子で僕に現われている場合、そのものは僕にとってそのようなものとしてあり、また君に何かの様子で現われておるならば、それはまた別に君にとってそのようなものとしてある。」
というしかたで分析されるからである（一五二A）。

「現われ」は「あり」を保障するであろうか。プロタゴラスは事実そうした線で考えていたようである。いま一度、風の事例に戻ってみるならば、風そのものは冷たくも暖かくもないとする考えかたと、風そのものが冷たくもあり暖かくもあるとする考えかたとが可能であるが、彼は後者の立場をとっていたらしい。すなわち、風には冷・暖二つの属性が内在しており、ある者はその一方を感覚し、別の者は他方を感覚することによって感覚の相違が生ずるとする、言わばより素朴な考えかたである。

そして、あるいはプラトン自身もまた『パイドン』の時点においては、こうした立場に近かったのではないかと考えられる。たとえば、背丈くらべの議論（一〇二B—一〇三A）。「シミアスはソクラテスより大きく、パイドンより小さい」という事態は、「シミアスの中には『大』と『小』との両方があり」、「一方の『大』に対しては凌駕されるべく『小』を提出し、他方に対しては、その『小』を凌駕するところの『大』を提出する」というしかたで説明されている。すなわち、『大』や『小』は、人間に内属する属性であることが明言されているのである。

(なお、こうした事例のとりかたは、けっして性質カテゴリーと関係カテゴリーの混同を意味するものではないこと、プラトンの意図はこうした場合を例にとることによって、感覺的事物とイデアとの相違を端的に示すところにあったということについては、旧稿で取りあつた⁽³⁾。ここでは、感覺的性質は例外なく比較的なものとして不完全なかたちでしか現われえないことに注目すべきである、という指摘だけにとどめたい。)

しかしいまや、次のヘラクレイトスの相対化によって、こうした事態も、より洗練された説明を与えられることになる。

〔ii〕存在論上の相対性 感覺主体も感覺対象も、それ自体としてそれぞれのもので「ある」のではなく、感覺という事態の成立において、はじめてそれぞれのものに「なる」という考えかたの提示である。問題は、言いかえれば、「現われ」の存在的資格を問うことである。

ソクラテスはまず、感覺は主・客のいずれかの一方的要因によるものではないことを再確認する。すなわち、もし対象が「もともと大きなものであったり、白いものであったり、温いものであったりするとしたら、そのものはいやしくも自分が少しも変化しない以上、他のもの〔すなわち別の感覺者〕に出会ったからといって、何も違った他のものになつたりすることはなかったはずである」し(一五四B—一三)、他方また感覺者の恣意のままに感覺が現われるのだとすれば「他のものがそこへやって来るとか他のものが何か作用を受けるとかしたところで、やはりまた、自分が何も受けたりしない以上は、違った他のものになつたりはしなかったはずである。」(同三一六)——したがって、「現われ」としての感覺的性質は、感覺者の主観のうちにあるのでないことは言うまでもなく、自体的な対象としての権利をも主張しえないのである。

では、どのように考えるべきなのか。それを示唆しているのが、‘some puzzles’として提出されている、ほかな

らぬ背丈くらべに類した事例である。たとえば、四個のサイコロとくらべたときにはそれよりも多い六個のサイコロを、次に十二個のサイコロとくらべるならばそれよりも少ない、という場合について考えてみよう。「あれらのものがああいふふうであるのは……何によってであるということになるのか」を、ソクラテスは直接には何も明らかにしていない。ただ、生成変化についての三つの同意事項を列挙しているだけである（一五五A—B）。それらのうち直接に問題になるのは、むしろ第三の「前にあんなかったものが後になってしかしそれがある」ということは、なることやなりゆく、ことなしには不可能である」という点である。以前には少なくなかった同じ六個のサイコロが、比較の相手が変わることによって、少なくなっているからである。しかし、この「少」という属性の生成過程を六個のサイコロそのものに求めることはできない。むしろそれ自体には「増大も減少もなく、いつでも等しい」のである。明らかに、「少」は十二個のサイコロとの相互関係において、何らかのしかたで生成したものであると考えなければならぬ。すなわち、「両者の「中間」に、生成過程の場を求めなければならないであろう。感覺的性質もまた、これと同様である。すなわち、感覺する者となるべき何ものかと感覺対象となるべき何ものかとが相互関係において感覺的性質とその感覺とを生成させ、それらを言わば「付帯的」にもつことによって、一方のものは感覺しているところの、何ものかとなり、他方のものは感覺的性質をもった何ものかとなる、と考えなければならぬのである。

たとえば、白色を感覺するという事態についての次のような分析の根底にあるのは、以上のような考えかたにはかならない。

「かくて、いま眼とそれから眼に合性の何か他のものが近しい仲になって、白色を生み、またこれと双生する感覺を生んだ時、……視覚の方は目から出るし、これに合わせてこの色を産むものからは白色が出て、その間互いに運動して、それで目はすなわち視覚の充すところとなり、そしてそのときじつに見るのである。すなわち目はその

場合決して視覚となるのではなく、見ている目となるのである。また、これに合わせてこの色を生むものは、一面に白色で充されて、これはまたこれで、白色というものになるのではなくて、白くなるのである。」(一五六D—E)

さて、感覺的事態が以上のようなものであるとするならば、アリストテレス的な存在構造は大きく揺がざるを得ないであろう。彼にとって自然的事物の根本的な「あり」を保障する独立存在としての「実体」はどこにも成立する余地がないからである。「何ももの他と没交渉にそれ自体で単一にあるのではなく、何かに対して常になりゆく」のである。しかも、この立場からするかぎり、アリストテレス的な意味での実体に属性が付帯するのではない。感覺的世界においては、むしろ「個々に分解されたもの」としての諸性質が多数「集合」することによってこそ、はじめて『人間』とか『石』とかいって、それぞれの動物なり他の品種なりの名前をつけているもの」すなわち実体は成立するのである(一五七C—D)。感覺に即してみるかぎり、このように実体のほうが性質に付帯するものであることは、ほかならぬアリストテレス自身もはっきりと認めている事柄である。——われわれは、ディアレスの息子をまず感覺し、次に彼が白いものであることを感覺するのではない。かえってその逆なのである。なぜなら「この者であることは、感覺している白いものに付帯しているからである。」⁽⁴⁾

他方、このように実体も性質ともに自体性を消失した生成的世界において、ある意味での自体性をわずかに残しているのは、感覺的事態の成立根拠としての「動」だけである。すなわち、感覺的事態の成立の第一次的な要因は、何らかの「作用を受けるデユナミスをもつもの」(たとえば眼)と「作用を及ぼすデユナミスをもつもの」(たとえば「眼に合性の何か」)であるが(一五六A)、実はこれら二種類のデユナミスの区別すら、両者の出会いをまっ

じめてそれとして生ずるのであり、より根源的には、「万有は本来が動なのであって、これを除外しては他の何もかもない」(一五六A)のである。

かくして、この自然的世界の根本は、ヘラクレイトスのな万有運動論に帰着するのであるが、さて次に、この帰着の意味するものを、プラトンにおけるヘラクレイトス主義の役割という観点からとらえなおしつつ、プラトンの自然学的構想の若干を望見することを試みたい。

- (1) Platon, *Phaedo*, 102 D-E 参照。「いったい、 \langle 大 \rangle そのものが、大であることと同時に小でもあることをけっしてのぞまないのは、むしろのこととして、さらには、われわれのうちにある \langle 大 \rangle もまた、けっして \langle 小 \rangle を受けいれず、みずから凌駕されることもぞまない。」
- (2) Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, p. 41
- (3) 「感覚物とイデアとの間」『古代哲学研究』第VI号所収)
- (4) Arist., *De anima*, II. 6. 418a 20-23.

二、生成的世界と魂

「プラトンは若いときから、まずクラテュロスに親しみ、ヘラクレイトスのな考えに親しんでいた。……この点に關しては、プラトンは後年に至ってからも、そのとおりの見解を持っていた」

というアリストテレスの証言⁽¹⁾をまつまでもなく、ヘラクレイトスのなインスピレーションは、プラトンの著作の随所において、きわめてはっきりと見てとることができる。しかも、プラトンにおいてヘラクレイトスのなものの占める役割は、ここでアリストテレスが指摘している以上に大きなものであると思われるのである。

アリストテレスによれば、プラトンにとってヘラクレイトス主義は、言わばイデア論へのスプリング・ボードとしての、否定的役割を果たしているにすぎない。すなわち、ヘラクレイトス説とは「あらゆる感覚的事物はたえず流転して、それらのものについては知は成立しえない」という前提を意味するのであり、そこで他方、知の存在という動かしがたい事実からイデアの存在を証明しようとする、いわゆる「へ知の存在に基づく議論」というコンテクストのうちに、それは位置づけられているのである。しかし、単に自然的世界の虚妄性を主張することに眼目があるのならば、ヘラクレイトス主義は必ずしも適切ではない。むしろ「あるものはあり、あらゆるものはあらぬ」という根本前提のもとに、動と多を全否定したパルメニデス・エレア主義にこそ「親しむ」べきであつただろう。

ヘラクレイトス思想の根本は、あくまでもイオニア的一元論にある。彼の唱えたロゴスといえども、ある場合には物質的な「火」と同一視されてすらいるほどに具体的な事物性を備えつつ、流転するこの世界の内にくまなくゆきわたっているのである。それはほとんど物理的な力と言われてしかるべきものである。さらに、「万物流転」というキヤッチ・フレーズ一つに徹した急進的ヘラクレイトス主義者の一人クラテュロスは、ヘラクレイトスが「同じ河に二度足を踏み入れることはできない」と言ったことをすら遺憾として、「一度たりともできはしない」と修正した、と言われている⁽²⁾。もし万物が徹底的に流転するならば、「それをさういう有様だと言っても、またさうでない有様だと言っても変わりがないことになる⁽³⁾」からである。かくして、あらゆる固定性を喪失した生成的世界に立ちつくして語るべき言葉をすら全く失った彼は、黙ったまま、あれこれと事物を指でさし示すほかなかったのである。——いや、むしろ逆に、それでもなおかつ彼は流転する諸事物に指を向けつづけた、と言わなければならぬ。すなわち、あくまでも彼はこの現実世界との関わりを持ちつづけたのである。万物を生成と流転のうちに解消しつつも、なおかつ、彼の指はけっして「天上」をさし示そうとはしなかったのである。ヘラクレイトス主義にあっては、この世界の事象

性はゆるぎのないものであった。

そして、プラトンが、あえてエレア主義を全面的に継承せず、ヘラクレイトス主義に親しみ、それを後年に至るまで保持しつづけたゆえんもまた、むしろ、この生成的世界そのものへの執着、万物の流転を容認しつつも、なおかつこの世界そのものに一定の存在性と価値性を見い出すべく努めた執念にこそ求められるのであろう。このような意味で、ヘラクレイトス主義は、エレア主義の対極をなすような位置にあって、プラトンのディアレクティケーのうちに、ポジティヴな意義をもたらししていると思われるのである。

今日の一般的評価としては、レウキッポスとデモクリトスによる原子論こそがイオニア自然学の最も完成された成果と目されがちである。しかしプラトンは、まぎれもなく、その頂点をヘラクレイトス主義に見ていた。デモクリトスおよび原子論という彼と同時代の思想に対するプラトンの徹底した黙殺ぶりは、かえって一抹の奇異な感じを残すにしても、プラトンにとって、結局のところ原子論は、原理的に不徹底な学説でしかありえなかった。彼らがたとえどれほど強力な「巨人」であったにせよ、しょせんは「岩や樫の木を両手でかかえ込む」ようにして、實在を「物体」に同定していることには、いささかも変わりないであらう。一切の感覺的性質の排除をたてまえとして想定されたアトムも、要するにきわめて微細な觸覚対象にすぎないからである。しかるに、そうした存在観は、非感覺的なものをも含めた「作用力」(デユナミス)を提示されることによって、たちまち修正を余儀なくされてしまふのである。それに対して、ヘラクレイトス主義とは、この修正をあくまで徹底化したところに存立している自然観なのである。

このような意味において、万物を動に帰着せしめるヘラクレイトス主義は、プラトンに至るまでの時代において、生成的世界をそのかぎりにおいて説明しつくすための、最も有効深遠な原理たりえていたのであり、まさにそうした

資格において、『テアイテトス』（第一部）におけるディアレクティケーの根底を担っているのである。

しかし、その反面、ヘラクレイトス主義は、一種の自壊作用によって、思想的不毛性と退廃性をのぞかせていることも否定しがたいのである。さきに言及したクラテュロスの場合からも、それは明らかであろう。

プラトン自身もまた、そうした危険性を完全に見究めているのであり、そのうえで、これを二つの基本構想によって打開していったのである。その一つは、言うまでもなく、イデアの措定である。そしていま一つは、この生成変化してやむことのない感覺的世界の根底に「魂」（プシューケー）を遍在せしめることであった。「万有は本来が動であり、これを除外しては他の何ものも存在しない」という帰着を受け入れつつ、しかもこの生成的世界に一定の意義を存続させていくためには、この「動」そのものの秩序と根拠を追求することによって、動の担い手としての魂実体という概念を確立することが、不可欠な要請だったのである。プラトンが、『テアイテトス』に先立って、「自己自身を動かす動」、「あらゆる動のアルケー」という魂の定義に到達しているのは、こうした思想展開において、まさにしかるべき手順であったと言えるであろう。

すなわち、このような動の原理としての「魂の発見」をまっぴら、はじめてヘラクレイトス的な万有運動論はポジティブな根拠を得たのであるが、そのことは同時に、プラトンが独自の自然哲学を構築する基盤を整え終えたことをも意味するものである。『ティマイオス』における宇宙論や『法律』第十巻における自然神学の展開などに典型的に見られる後期プラトンの自然観の根幹は、物体からスティケイアへ、スティケイアから動へ、動から魂へ、という徹底的な遊行深化の過程にはかならないのである。

「魂について、友よ、ほとんどすべての人びとは、それがいかなるものであるのか、また、すべてのことがら、と

りわけ生成に関してどのような力を持つものであるのか、について無知であるらしいが、しかしこれこそは、あらゆる物体よりも先に生まれた第一のものであり、物体のあらゆる変化と変容を、何にもまして支配しているものなのだ。」

『法律』に登場するアテナイからの客人は、壮大な論証をしめくくるにあたって、ゆるぎない確信に満ちた口調で、こう断言している（八九二A）。

魂は、イデアと並んで、プラトンの‘*philosophical economy*’を支える二大要因であり、認識と存在と価値の全領域にわたって、さまざまな役割を果たしている。それらの全面的な把握は当面しておき、ここでは、以上に述べてきたような、生成的世界を究極において担うものとしての魂、という一側面において、特に気づかれる点に言及しておきたい。それは、魂と生成的事物の実体性・個別性との関連である。

すでに述べたように、われわれの感覚的世界において一見最も自明な存在である物体およびアリストテレス的な「このもの」（トデ・テイ）は、けっして文字通りのトデ・テイあるいはウーシアアとして取りおさえることのできないもの、要するに、「何らか様のもの」（ポイオン・テイ）でしかありえないものである、というのが、プラトンの洞察の結果であった。とすれば、この生成的世界における実体性（それはしよせん「生成の実体性」とでも言うべきものでしかありえないにしても）は、何によって保障されるのか。この問いに答えるためには、まさに魂そのものの次元にまで降りて行かなければならないであろう。すなわち、感覚的世界の基底にたえず流動している無数の動の核をなしている個別的な魂にまで到達しなければ、生成的事物の実体性・個別性は成立しえないであろう。——いみじくも、『ティマイオス』（三四B以下）によれば、魂は、「有」・「同」・「異」という、まさに個別原理を支える三

つの「本性の混合によって」成立するものとされているのである。

さらにまた、藤沢教授が *Phronesis* 誌上⁽⁷⁾において跡づけられた、イデアの分有論からパラダイグマ⁽⁸⁾イイコ⁽⁹⁾ン理論へ、というプラトン哲学の発展のシエマも、おそらくは、こうした魂の位置づけの確立と深い呼応関係を葆ちつつ成立していったように思われる。すなわち、中期イデア論の基本公式 ‘ x is $F \parallel x$ has F because x participates in F ’ (‘ある事物 x が何らかのもの F であるとは、 x が[F の]イデア F を分有することによって、 F という属性を持つことである。’)から、 x を消去する⁽¹⁰⁾とは、⁽¹¹⁾とりも直さず ‘the ultimate status of x (‘this something’)’ が魂にまで帰着することの確認を意味するものではないか。かくして、中期の分有論は、後期に至って、魂論とパラダイグマ⁽¹²⁾イイコ⁽¹³⁾ン理論とに分化していった、と考えてみたいのである。ともかくも、‘possession用語’、‘participation用語’の消失が、まさに動のアルケーとしての魂概念の登場と軌を一にしていることは、大いに注目すべきではないだろうか(同論文四二ページの付表参照)。

われわれの自然的世界は、プラトンによれば、魂によって根底を支えられた秩序ある動の作用と、その作用の場に映し出されるイデアのイイコ⁽¹⁴⁾ンによって成り立っているのである。

- (1) Arist., *Metaphysica* A6, 987a 32 sqq.
- (2) *ibid.* F 5, 1010a 7 sqq.
- (3) Platon, *Theaetetus*, 183A.
- (4) Platon, *Sophistes*, 245E sqq.
- (5) Platon, *Theaetetus*, 181B–183C.
- (6) Platon, *Phaedrus*, 245C–246 A.
- (7) Fujisawa, N., “‘*Eye*’ *Metéteu* and Idioms of ‘Paradeigmatisim’ in Plato’s Theory of Forms”, *Phronesis*, vol.

XIX, 1, pp. 30-58.

〔付記〕

引用中、左記二篇については『プラトン全集』（岩波書店刊）のものを使用させていただきました。

『テアイテトス』（田中美知太郎訳）

『パイドン』（松永雄二訳）